

性低下にディスクが CER から CEZ に変えられた点の影響はないのか。

大谷 (順大) CFS と CEZ では異なると思いま

すが、私達のデータが CFS から CEZ にかわつたのは、中検が CEZ を用いるようになったからです。

慢性化膿性中耳炎分離の多剤耐性ブドウ球菌の 薬剤感受性に関する検討

野 村 隆 彦*

慢性化膿性中耳炎の耳漏より分離される細菌のうち、黄色ブドウ球菌の検出率は、グラム陽性球菌に有効な抗生物質の発達した現在でもなお首位を占め、しかも多数の薬剤に耐性を示し、治療上の障害となる症例が増加していることから、最近の黄色ブドウ球菌の薬剤感受性に関する検討を行った。

本年2月から5月までの4カ月間に細菌学的検索を行った40耳(重複を含まず)から分離された48株のうち黄色ブドウ球菌は23株で、緑膿菌の11株に比して圧倒的に多く、全体の48%を占めた。検出した23耳のうち14耳は非手術耳、9耳が手術後の耳漏再発例である。これらのうち単独感染は18耳であった。

分離菌の薬剤感受性を PC, ABPC, SBPC, EM, LCM, CET, CER, DOXY, TC, SM, AMK, GM の12種類の薬剤について、ディスク法で検討したところ、全薬剤に(++)以上の感受性を示したのは2例

だけで、残りの21例はいずれかの薬剤に耐性を示し、しかも全体の70%にあたる16例が5剤以上最高8剤耐性であった。多剤耐性となる症例の耐性パターンは PC, ABPC, EM, LCM, SM の5剤に耐性であることが多く、それに加うるに GM, SBPC, AMK の順で耐性を示した。

GM は1974年～1976年の当施設での耐性率成績が1%であったのが今回は43%と急激な増加を見せしており、しかも GM 耐性である場合は必ず5剤以上の多剤耐性であった。GM 耐性株増加は GM 局所投与に関連あるものと考えられ、当施設の長期間受診者に多くみられたことから、GM の局所投与について再検討を要するものとする。CET, CER, DOXY, TC についての耐性は今回の成績ではほとんどなかったが、今回はこれらの薬剤に対する耐性株の問題も重視されるようになるであろう。

鼻疾患における嫌気性菌検索成績

西本 敬子・棚橋 聡子・森崎 京子
浅井 栄司・赤木 博文[†]・渡辺 邦友
上野 一恵^{††}・沢 赫代^{†††}

鼻疾患における嫌気性菌について検索した。

〔I〕被験者

1978年10月より1980年6月までの期間に、岐阜

大学耳鼻科を受診した97名を対象とした。内訳は、併合性副鼻腔炎39名、術後性頬部嚢腫20名、上顎腫瘍4名、前頭洞炎4名、急性副鼻腔炎4名、その他

* 愛知医科大学耳鼻咽喉科学教室

† 岐阜大学医学部耳鼻咽喉科学教室

†† 岐阜大学医学部嫌気性菌実験施設

††† 岐阜大学医学部中央研究室

26名である。

〔Ⅱ〕方法

① 採取：鼻腔内は綿棒，上顎洞などは穿刺にて検体を採取し，ケンキポーター（クリニカルサプライ）に入れて輸送した。

② 分離同定：分離は大部分増菌法によつた。同定は岐大嫌気性菌実験施設の方法によつた。

③ 感受性検査：16種の薬剤について検討した。化学療法学会の定める標準法に従つて最小発育阻止濃度（MIC）を求めた。接種菌量は 10^6 ， 10^8 の二点法とした。

〔Ⅲ〕結果

① 鼻疾患 97名中 24名（24.7%）に嫌気性菌が検出された。主なものは，併合性副鼻腔炎 39例中 13例（33.3%），上顎腫瘍 4例中 1例，術後性頬部嚢腫 20例中 1例などである。

② 分離された菌種は，*Bacteroides fragilis* 4株，*Veillonella parvula* 4株，*B. fragilis* 以外の *Bacteroides* 3株，*Propionibacterium* 2株，*Fusobacterium* 1株，*Bifidobacterium* 1株，*Peptococcus magnus* 2株，*Peptostreptococcus micros* 1株，*Peptococcus species* 1株，*Streptococcus cons*

tellatus 1株であつた。

③ 薬剤感受性パターンを見てみると，TC 耐性株が *B. fragilis*，*Propionibacterium*，*P. magnus* に認められ，CLDM 耐性株は *B. fragilis* では認められなかつたが，*Propionibacterium*，*P. magnus* には認められるなど，今回分離された嫌気性菌は，薬剤に対する耐性を獲得する傾向にあることがわかつた。

質疑応答

馬場（名市大） 貴教室の以前の発表では *Bacteroides melaninogenicus* の検出率が高く，その臨床的意義が強調されていたが，今回の発表ではそれが含まれていない。それがどのような理由によるものか御教示下さい。

西本（岐阜大） *B. melaninogenicus* が生えやすい血液寒天培地，メナジオン加 GAM 寒天培地を今回は用いながつたため，*B. melaninogenicus* は同定されていません。しかし，*Bacteroides spp.* の中には *B. melaninogenicus* と思われるものが存在していました。

慢性副鼻腔炎に対する各種薬剤による ネブライザー療法の検討

—Lysozyme ならびに Thiamphenicol 混合液による治験成績—

古田 茂 ・ 昇 卓夫
森川 謙三 ・ 大山 勝*

慢性副鼻腔炎の治療において，今日ネブライザー療法は広く用いられ，その有用性についての報告もみられる。しかし，その薬剤の選択や用量については，必ずしも合理的な結論に達していないのが現状である。

今回，われわれは，1978年8月より1979年7月までの1年間に鹿児島大学およびその関連病院において，慢性副鼻腔炎症例に対する2～3の薬剤の単独な

いは併用ネブライザー療法を試み，それらの臨床効果を比較検討した。その結果，これらの薬剤が慢性副鼻腔炎に対するネブライザー療法の一つとして有用と考えたので報告した。

対象は68例で，試験薬剤として，3% Lysozyme 液と5% Thiamphenicol+3% Lysozyme 液であり，比較対照薬として生理食塩水を double blind の形で使用した。原則として週4回以上，4週間ネブラ

* 鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科学教室